

1)哲学文化

1-1 変わりづらい原理

中小事業者も大手事業者も、根本的な基準には同一性が備わる。設計開発や製造施工、物流や流通、広告、金融情報、といった各要素と相関の体系を備えて、一事業体としての完結的一巡性の仕組みが作られる。大手事業者は、量や規模を扱う分、各工程を専門分化させる割合が進み個々の人的性格は、専門性が進み全体を掌握する全体性の弱まりと、根源や根幹の歪性を招く傾向が増す。中小事業者は分化性の割合は減り個々が多能工を有し、全体性と根源性の適当なバランス感覚を作り上げられる。一主体性としての変わりづらい根源且つ根幹及び全体と習慣を持続する性格となって人的性格と仕組みが存続する。量的規模に依存した事業の存続と成長への偏りが増進するほどに根源と根幹と全体と習慣の歪性が出現し、人間の適正観の狂いが現れる。産出する物事によって量を求める分野を生み、インフラ性の事業体として量と安定の仕組みを確立させるハード的な面に重心を有する対象と主体性や領域化の原理というソフト面のインフラ性の観点が出現し、前者と後者の性格を合わせて、生態の健全と永続に及ばせる長期基盤性の良質を問い作る精神と身体と観念の相関と習慣が形成される。

1-2 今日の傾向

物質的量への依存感覚が強まり、主体性の根本原理という習慣性の適正に関心が弱まる事による長期的性質の変容への警戒をもって、適正な質の基準を基にして適正量を探し制御させる長期法則性に基軸を備えた人間と生態の相関性にあって根源と根幹と全体の適正軌道が保たれる。どこか現代の状況や潮流は、物質感覚の依存性が高まって質的変容と不健全性が増し、根源と根幹の歪みが増大する姿を広げる面が目立つ心象が作られる。個々の構成要素は大規模な組織の歯車性が進んで、完結的一巡性の主体性と習慣性が弱まり、分化と専門性が高まり、全体と根源と根幹の下落性に陥り、人間や主体性の普遍的不変性の原理の崩れた様子が広がる。画一と規模の合理性の潮流が高まる事の弊害面となって、人間や主体性の根本原理を問い、あまりに分化性と統合性の弱まる個々人や事業体が進む事の無き、質への適正を求める発想が出現する。

1-3 根源且つ根幹と全体性と習慣性

「精神性と身体性と観念の相関」や「分化性と統合性と領域観の形成」という根本的な観点や原理を抽出し、長期的な主体性や生態の適正を問い、あまりに歪性が増すようなことに陥らぬ発想や感性の出現を見る哲学文化等という性格の個性が産まれる。いつの時代にも変わりづらい人間や主体性の根本的な観点と原理が引き出され、時々の環境変動に対面しながら、不動性の観点を土台にして、対象範囲の想定と適正を導出する方法的工程の制御を遂げる原理となって、普遍的不変性が働く。「根源且つ根幹及び全体と習慣に見る主体性や領域化や生態の原理」等という観点と体系を導出する創造力が産まれる。

1-4 基軸性の観点

生滅不可分という根源の感性が存続し、抽象と準抽象と具象の観点と相関を起こし再生産と持続に及ぶ最良的な方法を引き出し投じる精神性や感性が稼働し短変数と急激な変化への適当性を導出し稼働させる創造に回る。「短変数・画一性・規模の効率性」という側面と、「多要素性と質の適正」という側面を対極性に起こし適正基準を基軸に創出し、過不足と評価の適正感を引き出し、変らぬ精神の健全性を求める方程式が稼働する。多様性と分散性に対し、短変数と量の統合性についての、適当性がどのあたりにあるか。基軸性の原理を探し、過不足と評価の適正に及ばせ、方法の妥当性を遂げる主体性原理が存続する。重力性となる基軸性の観点と体系を引き出し、基準観点の弱まる制御不能性に陥らぬ人間性と領域性をもって、普遍的不変の基準と創造の基調が産まれる。無思考物化の性格が強まるほどに、基軸性や重力性を喪失した外界の受動反応が強まり、根源と根幹と全体と習慣に歪性が増進し、短期利益に偏った長期性の減退に陥る。こうした観点を有する人的性格において空間や生態の中心性を担う資質が映し出される。空間としての変わりづらい良質を求める根源的な精神性を内蔵し、時々の環境に対面し、最良的生を引き出す精神と態度が出現する。保守と革新なる抽象観点を起こす根本的な前段性の観点の厚みを増し、単純な二極性に陥らぬ健全な生命の稼働する主体と生態が作られる。

1-5 物質依存性の強まりと対処と予防

あまりに成熟性を欠く破壊性を招く事のなき、人的資質と仕組みの確立に関心が注がれて、一過性の利益に振り回されぬ重力性と制御を遂げる現象性に至る。根源性や根幹性と全体性の歪化した感覚を中心性に配すると、歪な社会性と生態が進み、取り返しのつかぬ性質の下

落が想定される。負のスパイラル性の強まる生態系が増す事の無い、根本的な原理の導出が望まれる。確かな根源且つ根幹と全体性と習慣性を有する人間と生態像を根本の概念と起こし、基礎土台的原理を備え、各種対象の選定と評価と予測と方法に及ばせる基準と稼働の規則性が進む。急激な変化か、適正な変化と判断するか。根本性の原理の有無や程度が正当性の根拠と働く。この根本的な根拠を問い概念と導出し提起する狭義の哲学文化という領域観が産まれる。

1-6 広義の哲学文化

静的と動的と動静の回る基本的な土台性の習慣と規則性を有する主体性原理を変わらぬ型枠と備え、狭義の哲学文化と教育金融性と政治行政性と産業経済性という各領域と相関の体系に具象化して、主体性と領域の健全と永続の軌道と実現の形が作られる。根源且つ根幹と全体と習慣の観念を反映して現れる主体性や領域化の適正像となり具象化される。

万人的に通じる適当な個性と相関の領域や体系を基礎土台性に持ち、根源且つ根幹と全体性の共有が進み、基礎基盤性の安定の基に、各種個性や特定領域の健全な発育と領域観の相互性や相乗性に及ぶ世界観や思想を生む。抽象と準抽象と具象の観点の導出と整合の体系観に及んで精神と身体と観念の有機的な主体性を存続させる。

静的 動的	狭義の哲学文化
	普遍的不変性の概念の導出と提起と改善
教育金融性	概念や領域観の精査と提起と稼働と検証と改善、 (定性性及び定量性) 経過と現況、評価、未来予測性
政治行政性	課題と方針と施策の序列と体系、 及び同一意思形成と稼働と検証と改善
産業経済性	個別政策と政策の全体

1-7 部分と全体の相関

どこかの領域が停滞すると他領域への良い産出性が萎み、全体としての適正が下落する。全体性を表す観念と各種領域の基本的な性格の認識に同一性と共通性を引き上げ、健全な主体性と領域と生態の永続性を実現する。健全な根源性と根幹性を反映して適正な分化と統合の制御と習慣に及ぶ基準概念が求められる。サイバー犯罪で人の論文を盗んで活用するような対象を放置すると、生態の根源と根幹の破壊と解される。この手の虫けらを放置するインフラは役割の不足と見做される。下限的な驕の満たない対象は、淡々と取り締まる事が、健全性へ及ぶ更生の過程となり得る。こうした下限的な適正が満たされて、プラス建設性の発想と循環の促進へ至る。未成熟者に過剰な力を与えぬ制御性が求められる。堂々と身元を明かし、堂々とした発想と創造の態度になって根源性と根幹性が現れる。歪性は取り除かないとプラス基調が広がらない。ごく私的な利益を求め、公性の利益が減退し、力を私的に活用する不均衡性が強まる事に人間の根源性と根幹性の壊れが現れる。平等の理性を失った非人間性と非社会性と破壊性の生態が進む事の無き、哲学文化が望まれる。

1-8 気性

ボンボン気質は日本的な性格と外れる。男女という性別による識別の前に肥満症と健全性という人間性を問う観点が先んじる。ボンボン育ちの歪性は男にも女にもあり得る。これを基軸に添えるような生態に陥らぬ根源基準を憲法等に明記するのが自然と思います。長年の習慣から人間の気性が作られる。自然律のように出現する。良い自然律を言葉や概念と固める作為が有効となり得る。